

ヨハネの福音書(21)

指導者たちの不信仰

ヨハ7:45~52

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④ サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥ 2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦ 後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧ 3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - * 仮庵の祭りでの教え(7:10~44)
 - * 指導者たちの不信仰(7:45~52)

2. 注目すべき点

- (1) イエスの仮庵の祭りでの説教が終わった。
- (2) 指導者たちはイエスを捕えたいと思った。
- (3) しかし、だれもイエスに手をかける者はいなかった。
- (4) エリート意識を持つ指導者たちの問題が明らかになる。

3. アウトライン

- (1) 下役たちの判断(7:45~46)
- (2) 指導者たちの偏見(7:47~49)
- (3) ニコデモの疑問(7:50~52)

4. 結論:ニコデモの信仰

指導者たちの不信仰について学ぶ。

I. 下役たちの判断(7:45~46)

1. 45節

Joh 7:45 さて、祭司長たちとパリサイ人たちは、下役たちが自分たちのところに戻って来たとき、彼らに言った。「なぜあの人を連れて来なかったのか。」

(1) 「下役」

- ①ローマ帝国は、ユダヤ人に一定の自治権を与えていた。
 - *ユダヤ人は統治するのが困難な民である。
 - *社会生活と宗教生活の分野は、ユダヤ人が自ら治めていた。
 - *ユダヤ教は公認宗教の地位を得ていた。
 - *ユダヤ議会(サンヘドリン)が統治していた。
- ②下役とは、神殿の警備や管理に携わる神殿警備隊である。
 - *彼らは、レビ人である。
 - *神殿を汚したり、神殿で騒ぎを起こしたりする者たちを逮捕した。
 - *彼らは、サンヘドリンの指揮下にあった。
- ③彼らは、イエスを逮捕するためにサンヘドリンから派遣されていた。
 - *サンヘドリンは、偏見によってイエスが有罪であると決めていた。

(2) 下役たちは、手ぶらで戻ってきた。

- ①イエスを逮捕する理由が見つからなかったのである。
- ②ローマ兵の場合は、任務に失敗すると死刑に処される。
- ③神殿警備隊の主な任務は、神殿域での秩序の維持である。
- ④イエスを逮捕しなくても、死刑に処されることはない。

(3) 祭司長たちとパリサイ人たちは怒り、なぜ任務を果たさないのかと詰問する。

- ①彼らは、イエスを尋問するための準備を整えて待っていた。
- ②しかし、事態は予期せぬ方向に展開した(イエスが連行されなかった)。

2. 46節

Joh 7:46 下役たちは答えた。「これまで、あの人のように話した人はいませんでした。」

(1) 下役たちは、逮捕する前に、イエスの教えに耳を傾けた。

- ①彼らは、イエスの教えに感動した。
- ②彼らは、これまでも高名なラビの教えを聞いてきた。
- ③しかし、イエスの教えは、そのどれとも異なっていた。
 - *権威、恵み、知恵に満ちていた。
 - *偏見なしに耳を傾けるなら、それが真理であることが分かる。
 - *ここには、罪人がイエスの教えに感動した例がある。
 - *先入観なしにイエスのことばに耳を傾ければ、真理が見えてくる。
- ④下役たちは、イエスの本質について証言している。

II. 指導者たちの偏見(7:47~49)

1. 47~48節

Joh 7:47 そこで、パリサイ人たちは答えた。「おまえたちまで惑わされているのか。」

Joh 7:48 議員やパリサイ人の中で、だれかイエスを信じた者がいたか。

- (1) パリサイ人たちは、下役たちを見下した。
 - ① 群衆は、律法に無知だから惑わされる。
 - ② 律法を学ばない者は、のろわれている。
 - ③ お前たちまで惑わされているのは、驚きである。

- (2) 指導者の中でイエスを信じた者はいない。
 - ① 議員とは、ユダヤ議会の議員たちである。
 - ② パリサイ人とは、公式な律法の教師たちである。
 - ③ 律法を学んだ者は、知恵があるので、惑わされない。
 - * 律法を学んだ者が最も不信仰な者であるというのは、皮肉である。
 - * 学びには、信仰につながるものと、不信仰につながるものがある。
 - ④ 指導者の中にもイエスを信じる者がいた。

2. 49節

Joh 7:49 それにしても、律法を知らないこの群衆はのろわれている。」

- (1) 指導者たちは、自らの知識を誇りとした。
 - ① 群衆は律法に関して無知なので、呪われている。
 - ② 申 28:15

Deu 28:15 しかし、もしあなたの神、【主】の御声に聞き従わず、私が今日あなたに命じる、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたをとらえる。

- (2) 呪われているのは群衆ではなく、指導者たちである。
 - ① エリート意識からくるプライドが、信仰の邪魔をしていた。
 - ② それゆえ、イエスのことばに耳を傾けることがなかった。
 - * 彼らは、下役たちのようではなかった。
 - * ニコデモのようでもなかった。

III. ニコデモの疑問(7:50~52)

1. 50節

Joh 7:50 彼らのうちの一人で、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。

- (1) かつて、夜にイエスを訪問したことのあるニコデモが疑問を呈した。
 - ① ニコデモとイエスの対話は、3章に記されている。

- ②彼は、同僚たちの霊的盲目状態と、それに基づく偏見に耐えられなくなった。
- ③彼は、イエスを擁護したわけではなく、結論を出す過程に疑問を呈した。

2. 51節

Joh 7:51 「私たちの律法は、まず本人から話を聞き、その人が何をしているのかを知ったうえでなければ、さばくことをしないのではないか。」

- (1) モーセの律法に基づいて、相手の言い分を聞いてから判決を下すべきだ。

①申1:16~17

Deu 1:16 そのとき、私はあなたがたのさばき人たちに命じた。「あなたがたの同胞相互の言い分をよく聞き、ある人とその同胞との間、また寄留者との間を正しくさばきなさい。」

Deu 1:17 裁判では人を偏って見てはならない。身分の低い人にも高い人にもみな、同じように聞かなければならない。人を恐れてはならない。さばきは神のものだからである。あなたがたにとって難しすぎる事柄は、私のところに持って来なさい。私がそれを聞こう。」

- ②ニコデモは、すでにイエスを信じていたと思われる。

3. 52節

Joh 7:52 彼らはニコデモに答えて言った。「あなたもガリラヤの出なのか。よく調べなさい。ガリラヤから預言者は起こらないことが分かるだろう。」

- (1) 指導者たちは、論理的にではなく、感情的に応答した。

- ①偏見があるので、事実関係を確かめる前に結論を出している。
- ②論理的に回答できないので、疑問を呈した相手の人格攻撃を始める。
- ③彼らは、ニコデモを軽蔑した。

*ユダヤの住民たちは、ガリラヤ人を見下していた。

- (2) 「ガリラヤから預言者は起こらないことが分かるだろう」

- ①これは言い過ぎである。

*エリシャ、ヨナ、ホセア、ナホムなどが、ガリラヤ出身であった。

- ②ガリラヤにラビの学校がなかったので、こういう発言になったのであろう。
- ③あるいは、「預言者」をメシアという意味で使った可能性がある。
- ④しっかり調査すれば、イエスがベツレヘム出身であることが分かる。

結論：ニコデモの信仰

1. 探求の段階（魂は真夜中の状態）

- (1) ヨハ3:1~21
- (2) イエスの「しるし」を見て、神から遣わされた教師だとの認識を持った。
- (3) イエスの神性や救いの計画について完全には理解していなかった。

- (4) 同胞からの批判を恐れたため、夜にイエスを訪問した。
- (5) 新生の重要性についてイエスから教えを受けた。

2. 公の場での弁護の段階(魂は夜明けの状態)

- (1) ヨハ7:50~51
- (2) イエスへの信仰が芽生えている。
- (3) 名声を失うことや共同体からの追放を恐れて、信仰告白には至っていない。

3. 公に告白する段階(魂は昼間の状態)

- (1) ヨハ19:38~42
- (2) アリマタヤのヨセフとともに、イエスの埋葬を行った。
- (3) 信仰が外面の行為として表現された。
- (4) 地上の富や名声よりも、イエスを信じる者たちとともに苦しむことを選んだ。

ヨハネの福音書(22)
姦淫の場で捕えられた女
ヨハ7:53~8:11

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - * 仮庵の祭りでの教え(7:10~44)
 - * 指導者たちの不信仰(7:45~52)
 - * 姦淫の場で捕えられた女(7:53~8:11)

2. 注目すべき点

- (1) 初期の写本群には、この箇所は含まれていない。
- (2) 福音派は、ヨハネの福音書の原典の一部ではないと考える。
- (3) カトリックは、ブルガタ訳に入っているので、聖典の一部と認める。
- (4) ヨハ20:30

Joh 20:30 イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。

- (5) 信頼できる初期の伝承が、写本を書く書記によって付加されたのであろう。
- (6) ほとんどの学者が、これを歴史的事実と認める。

3. アウトライン

- (1) 状況説明(7:53~8:2)
- (2) 指導者たちの罫(3~6節a)
- (3) イエスの応答(6b~8節)
- (4) 結末(9~12節)

4. 結論: 私たちへの適用

姦淫の女の物語から教訓を学ぶ。

I. 状況説明(53~2節)

1. 53~1節

Joh 7:53 「人々はそれぞれ家に帰って行った。

Joh 8:1 イエスはオリーブ山に行かれた。

- (1) 祭りが終わったので、人々はそれぞれの家に帰った。
 - ①イエスを顔と顔を合わせて見て、信じる人たちが起こされた。
 - ②しかし、大半の人たちがイエスを拒否した。
 - ③指導者たちは、早くイエスを逮捕せねばならないと確信した。

- (2) 1節の冒頭にあるギリシア語の「de」が訳されていない。
 - ①訳せば「しかし」(but)である。
 - ②イエスには、枕するところもないのである。
 - ③ベタニヤに宿泊することもあったが、オリーブ山が主な宿泊地であった。

2. 2節

Joh 8:2 そして朝早く、イエスは再び宮に入られた。人々はみな、みもとに寄って来た。イエスは腰を下ろして、彼らに教え始められた。

- (1) 朝早く、イエスは再び宮に入られた。
 - ①オリーブ山からキデロンの谷に下り、そこから神殿に上る。
 - ②徒歩で30分弱の移動である。

(2) ルカ 21:37~38

Luk 21:37 こうしてイエスは、昼は宮で教え、夜は外に出てオリーブという山で過ごされた。

Luk 21:38 人々はみな朝早く、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとにやって来た。

- ①民衆は、いつものパターンに従って行動している。
- ②指導者たちは、イエスが神殿のどこで教えるかを予想できた。

II. 指導者たちの罫(3~6節 a)

1. 3~5節

Joh 8:3 すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫の場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、

Joh 8:4 イエスに言った。「先生、この女は姦淫の現場で捕らえられました。」

Joh 8:5 モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするよう私たちに命じています。あなたは何と言われますか。」

- (1) 律法学者とパリサイ人が、イエスのもとに来た。
 - ①律法学者は、律法の研究をし、写本を制作する法律の専門家である。
 - ②パリサイ人は、パリサイ派に属する人である。
 - ③彼らは複数の証人によって、ある女の罪を糾弾しようとしている。
 - ④「先生」という呼びかけは偽善である。

- (2) 姦淫の場で捕えられたひとりの女が真ん中に置かれた。
 - ①恐らく既婚の女性であろう。姦淫(モイケイア)と淫行(ポルネイア)
 - ②証人が複数いる。
 - ③誰が見ても有罪が宣言されるケースである。
 - ④申19:15

Deu 19:15 いかなる咎でも、いかなる罪でも、すべて人が犯した罪過は、一人の証人によって立証されてはならない。二人の証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。

- (3) 姦淫に関するモーセの律法の規定
 - ①レビ20:10

Lev 20:10 人が他人の妻と姦淫したなら、すなわち自分の隣人の妻と姦淫したなら、その姦淫した男も女も必ず殺されなければならない。

- ②申22:22

Deu 22:22 夫のある女と寝ている男が見つかった場合は、その女と寝ていた男もその女も、二人とも死ななければならない。こうして、あなたはイスラエルの中からその悪い者を除き去りなさい。

- (4) モーセの律法によれば、男女ともに裁かれなければならない。
 - ①ここでは、相手の男の姿がない。
 - ②これは仕組まれた罠である。
 - ③指導者たちが訴えている方法自体が、すでに律法違反である。

- (5) 律法学者とパリサイ人は、イエスに挑戦した。
 - ①モーセの律法によれば、この罪は石打ちに当たる。
 - ②「あなた」に強調がある。
 - ③イエスが、モーセの律法をどう解釈し、どう適用するかを問うたのである。

2. 6節 a

Joh 8:6a 彼らはイエスを告発する理由を得ようと、イエスを試みてこう言ったのであった。

(1) 彼らは、イエスを告発する理由を得ようとした。

- ①告発する理由が見当たらないので、自分たちでそれを作り出した。
- ②これまで口伝律法を巡る議論が行われてきたが、成功しなかった。
- ③そこで、モーセの律法を取り上げている。

(2) イエスはジレンマに直面した(正義と恵みをいかに調和させるか)。

①石打ちの刑を命じた場合の結果

- *その可能性は、大いにある。
- *恵みに溢れた寛大なメシアだという評価と矛盾する。
- *指導者たちは、イエスをローマの法廷に引き渡すことができる。
- *ヨハ18:31

Joh 18:31 そこで、ピラトは言った。「おまえたちがこの人を引き取り、自分たちの律法にしたがってさばくがよい。」ユダヤ人たちは言った。「私たちはだれも死刑にすることが許されていません。」

②罪の赦しを宣言した場合の結果

- *モーセの律法に反する宣言をしたことになる。
- *それゆえ、イエスはメシアではないと判断される。

III. イエスの応答(6b~8節)

1. 6節 b

Joh 8:6b だが、イエスは身をかがめて、指で地面に何か書いておられた。

(1) イエスは地面に何を書かれたのか。

①動詞はカタグラフィオである。

- *文字でも、絵でも、何かのしるしでも、すべて可能性あり。

②ある人たちは、イエスが告発する人たちの罪を書いていたと推測する。

③イエスが書いたものは残っていないが、文字を書けたことは確かである。

(2) 強調点は「指で」にある。

- ①何を書いていたかは、重要ではない。
- ②モーセの律法は613の規定から成っている。
- ③十戒だけが、神の手によって書かれた。
- ④姦淫の禁止は、十戒の中に出てくる。

(3) 旧約聖書の証言

①出31:18

Exo 31:18 こうして主は、シナイ山でモーセと語り終えたとき、さとの板を二枚、すなわち神の指で書き記された石の板をモーセにお授けになった。

②出32:15~16

Exo 32:15 モーセは向きを変え、山から下りた。彼の手には二枚のさとの板があった。板は両面に、すなわち表と裏に書かれていた。

Exo 32:16 その板は神の作であった。その筆跡は神の筆跡で、その板に刻まれていた。

(4) イエスは、モーセの律法の作者である。

- ①告発する者たちは、罪を正すための正当な手続きを踏んでいない。
- ②イエスは、彼らの動機が間違っていることを知っておられた。
- ③イエスは、時間を置くことで彼らに悔い改めの機会を提供しておられた。

2. 7~8節

Joh 8:7 しかし、彼らが問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」

Joh 8:8 そしてイエスは、再び身をかがめて、地面に何かを書き続けられた。

(1) イエスのことばの背景には、モーセの律法のラビ的解釈がある。

①申17:6~7

Deu 17:6 二人の証人または三人の証人の証言によって、死刑に処さなければならない。一人の証言で死刑に処してはならない。

Deu 17:7 死刑に処するには、まず証人たちが手を下し、それから民全員が手を下す。こうして、あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。

- ②最初に石を投げる証人は、同じ罪を犯していない人でなければならない。
 - *無罪という意味ではない。
- ③イエスは、証人たちが同じ罪を心に宿していることを知っていた。
 - *イエスは、姦淫の女ではなく、指導者たちを裁かれた。

(2) イエスは、罪の裁きを否定しているわけではない。

- ①イエスは、モーセの律法の正しい運用を命じられた。
- ②イエスは、罪を大目に見ているのではなく、指導者たちの罪を糾弾された。
- ③指導者たちは、ジレンマに直面させられた。

(3) イエスは、再び身をかがめて、地面に何かを書き続けられた。

- ①指導者たちに、自らを省みる時間を与えた。

IV. 結末(9~12節)

1. 9節

Joh 8:9 彼らはそれを聞くと、年長者たちから始まり、一人、また一人と去って行き、真ん中にいた女とともに、イエスだけが残された。

- (1) 証人たちは、全員が去って行った。
 - ①年長者は先に良心の呵責を覚えたのであろう。
 - ②彼らは、同じ罪を心に宿していたのである。
 - ③告発する者と証人がいなくなったので、告発は無効になった。

- (2) イエスと女だけがその場に残された。
 - ①人の罪を裁くことができるのは、イエスだけである。
 - ②群衆もいたであろう。

2. 10~11節

Joh 8:10 イエスは身を起こして、彼女に言われた。「女の人よ、彼らはどこにいますか。だれもあなたにさばきを下さなかつたのですか。」

Joh 8:11 彼女は言った。「はい、主よ。だれも。」イエスは言われた。「わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません。」

- (1) イエスは、女に敬意を示した。
 - ①イエスは、女の罪よりも彼女を訴える者たちに関心を示された。
 - ②訴える者たちがいなくなったので、告発は無効となった。
 - ③彼女は、やがて裁き主キリストの前に立つが、今ではない。
 - ④彼女にやり直しの機会が与えられた。
 - ⑤イエスは、女の罪を大目に見たのではない。
 - ⑥イエスは、神の小羊として罪の贖いの代価を支払おうとしておられる。

- (2) 律法学者とパリサイ人は、謙遜にさせられた。
 - ①これ以降、イエスに罾を仕かけることはなくなった。

結論：私たちへの適用

1. 律法と恵みは、神の愛の両輪である。
 - (1) 律法の役割は、私たちの罪を示すことである。
 - (2) 罪を認識した者の罪を赦すのが、恵みである。

2. 赦されない罪はない。
 - (1) 罪の赦しの根拠は、イエスの十字架の死である。

(2) 赦しを受け取る方法は、信仰である。

3. 他人を裁く前に、自分も同じ罪を犯していないかどうか、吟味すべきである。

(1) 神から与えられている時間を有効に用いる。

(2) 自分の罪を示されたなら、それを告白して、清めを受ける。

4. 赦しは、罪を犯し続けることへの許可証ではない。

(1) 赦しは、立ち直りへの招待状である。

(2) 神の裁きは延期されたが、やがて神の裁きの前に立つ日がやってくる。

ヨハネの福音書(23)

世の光イエス

ヨハ8:12~20

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - * 仮庵の祭りでの教え(7:10~44)
 - * 指導者たちの不信仰(7:45~52)
 - * 世の光に関する説教(8:12~59)
 - ・世の光イエス(8:12~20)
 - ・唯一の救い主イエス(8:21~30)
 - ・解放者イエス(8:31~59)

2. 注目すべき点

- (1) 場面は、十字架にかかる約半年前の仮庵の祭りである。
- (2) イエスは、祭りの終わりの大いなる日に、立って大声で人々を招かれた。
- (3) 「いのちの水」への招きの後、指導者たちによる迫害が激化する。
- (4) 霊的闇に光をもたらすのがイエスである。
- (5) 「世の光」の説教は、7つの説教の中の5番目である。

3. アウトライン

- (1) イエスの宣言(12節)
- (2) 論争(13~19節)
- (3) 結末(20節)

4. 結論

- (1) 人生の渇きに対する答え

(2) 人生の不安に対する答え

イエスは世の光であることを学ぶ。

I. イエスの宣言 (12 節)

1. 12 節

Joh 8:12 イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」

(1) この宣言をしたのはいつか。

- ①「姦淫の女」の箇所は挿入句である。
- ②つまり、「祭りの終わりの日」（恐らく 8 日目）が続いているということ。
- ③イエスは、人々を招かれた。

(2) この宣言をした場所はどこか。

- ①20 節によれば、「献金箱のちかく」である。

* 地図を表示

- ②婦人の庭に 13 の献金箱が置かれていた。
- ③箱にはラッパのような形をした口が付いていた（ショフェロット）。
- ④人々、特にパリサイ人たちは、この口の中に献金を投げ込んでいた。

* 献金箱の写真を表示

(3) 仮庵の祭りで行われた儀式

- ①シロアムの池から水を汲んで祭壇に注ぐ儀式があった。
- ②もう一つの儀式は、ランプに火を灯すというものである。
- ③巨大な燭台が 2 台そこに置かれ、夕暮れになると、祭司たちが火を灯した。

* 50 キュビトの高さ (22 メートル)

* 燭台の上に 4 個のランプが置かれていた。

- ④ランプの光は、エルサレムの狭い路地まで照らしたという（ミシュナ）。
- ⑤レビ人の聖歌隊が階段の上に整列し、讚美歌を歌った。

* 詩 120~134 篇 「都上りの歌」、「都に上る歌」

* 巡礼歌であり、祭司たちが階段を上った時に歌われた歌でもある。

* 階段の段数は、15 段である。「都上りの歌」も 15 ある。

* 階段の写真を表示

- ⑥その音楽に合わせて、祭司、パリサイ人、巡礼者たちが、夜通し踊った。

* 仮庵の祭りは、喜びの祭りである。

* もう一つの光の祭りは、ハヌカの祭りである（ヨハ 10 : 22）。

(4) 「世の光」の意味

- ①ユダヤの文書には、「世の光」という用語が頻繁に登場する。
- ②イスラエル、エルサレム、族長たち、メシア、神、有名なラビたち、律法
- ③ラビ的解釈
 - * 灯された火は、シャカイナグローリーの象徴である。
 - * シャカイナグローリーは、神の臨在の現れである。
 - * 灯された火は、荒野の旅で現れた雲の柱と火の柱の象徴である。
 - * 灯された火は、幕屋に宿ったシャカイナグローリーの象徴である。

(5) 再度、イエスの主張を確認する。

Joh 8:12 イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」

- ①イエスは、ご自分がシャカイナグローリーだと宣言しておられる。
- ②変貌山では、3人の弟子たちがシャカイナグローリーを目撃した。
- ③さらに彼らは、天からかかった父の声を聞いた(バット・コル)。
- ④イエスは、イスラエルの民の間に現れたシャカイナグローリーである。
- ⑤ヨハネの福音書の中の2番目の「I am.」である。

II. 論争(13~19節)

1. 13節

Joh 8:13 すると、パリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分で自分のことを証しています。だから、あなたの証しは真実ではありません。」

- (1) これは、モーセの律法に基づく法律議論である。
 - ①申17:6と19:15の規定
 - * 2人、または3人の証人の証言が必要である。
 - ②ラビたちは、自己証言の有効性を認めなかった。
- (2) しかし、「姦淫の女」の裁きにおいては、彼らはこの規定に違反した。
 - ①自分たちが違反した規定を、イエスに適用している。
 - ②彼らは、最初からイエスを信じるつもりはないのである。

2. 14節

Joh 8:14 イエスは彼らに答えられた。「たとえ、わたしが自分自身について証しをしても、わたしの証しは真実です。わたしは自分がどこから来たのか、また、どこへ行くのかを知っているのですから。しかしあなたがたは、わたしがどこから来て、どこへ行くのかを知りません。」

- (1) イエスは、自分は複数の証人を必要としていないと言われた。
- ①自己証言が否定される理由は、人間の判断には偏見があるから。
 - ②しかしイエスは、完ぺきな自己認識を持っておられた。
 - ③父のもとから来て、父のもとに帰ろうとしているのを知っておられた。
 - ④イエスは神であるので、その証言に誤りはない。
- (2) しかし、パリサイ人たちは無知で、偏見に満ちている。
- ①彼らは、イエスがどこから来たかを知らない。
*父のもとから来たシャカイナグローリーだということを知らない。
 - ②彼らは、イエスがどこに行くかを知らない。
*イエスは、死後に復活し、父なる神のもとに行こうとしておられる。

3. 15~16節

Joh 8:15 あなたがたは肉によってさばきますが、わたしはだれもさばきません。

Joh 8:16 たとえ、わたしがさばくとしても、わたしのさばきは真実です。わたしは一人でなく、わたしとわたしを遣わした父がさばくからです。

- (1) パリサイ人たちの裁きの特徴
- ①肉によってさばく。
 - ②表面的なことしか見ない。
 - ③イエスの本質が見えない。
 - ④イエスのことを「ナザレの大工」としてしか見ていない。

(2) イエスの裁きの特徴

- ①イエスは裁かない(ヨハ3:17)。

Joh 3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

- ②終末における裁きにおいても、父なる神の裁きを執行するだけである。
- ③イエスが裁くなら、その裁きは常に正しい。
- ④イエスひとりの裁きではなく、父なる神とともに裁くからである。
- ⑤イエスは、父なる神と一体性を強調された。
- ⑥パリサイ人たちから見ると、これは冒瀆罪に当たる。

4. 17~18節

Joh 8:17 あなたがたの律法にも、二人の人による証しは真実であると書かれています。

Joh 8:18 わたしは自分について証しする者です。またわたしを遣わした父が、わたしについて証ししておられます。」

- (1) 「あなたがたの律法」という言い方は、皮肉である。
 - ①彼らは律法の所有者であるが、それを都合よく利用しているだけである。
 - * 本当に所有者なら、その命令に完全に従うはずである。
 - ②イエスは、律法が2人ないし3人の証人を要求していることを認めた。

- (2) ここには、ユダヤ的論法がある(大から小への論法)。
 - ①もし、人間の証人(2人ないし3人)が有効だとするなら、ましてや…。
 - ②イエスが、第1の証人である。
 - * イエスが行ったしるし
 - ③父なる神が、第2の証人である。
 - * 天からの声
 - ④それでもユダヤ人たちは、イエスを信じようとはしなかった。

5. 19節

Joh 8:19 すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいますか。」イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしも、わたしの父も知りません。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知っていたでしょう。」

- (1) 彼らのことばは、イエスに対するあざけりである。
 - ①あなたの父は誰かではなく、どこにいるのかと聞いた。
 - ②イエスが、神を父だと主張していると理解した。
 - ③イエスの誕生に関する噂を知っていたのであろう。
 - ④父が証人なら、法廷に出廷しなければならない。

- (2) タルムードにイエスに関する記述がある。
 - ①サンヘドリン (Sanhedrin) 43a
 - * イエシュという人物がペサハ(過越)の前日に「魔術を行い、イスラエルを惑わせた」として処刑された。
 - ②シャバット (Shabbat) 104b
 - * イエシュは、エジプトで魔術を学んだ。
 - ③ギティン (Gittin) 56b-57a
 - * 地獄での罰を受けている者として名前が挙がっている。
 - ④トセフタ・ハギガ (Tosefta Chullin) 2:22
 - * イエスの母は「パンテラ (Pandera)」という人物によって妊娠した。

- (3) イエスの回答
 - ①福音書では、イエスは一度もヨセフを父と呼んでいない。

- ②イエスが誰であるかを知らないなら、父をも知らない。
- ③イエスを通してでなければ、父を知ることはない。

III. 結末(20節)

1. 20節

Joh 8:20 イエスは、宮で教えていたとき、献金箱の近くでこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

- (1) イエスは、公然と話しておられた。
 - ①神殿の中の婦人の庭、献金箱のある所で、教えた。
- (2) しかし、だれもイエスを逮捕しなかった。
 - ①神の守りがあったから。
 - ②「イエスの時」(十字架の時)が、まだ来ていなかった。

結論

1. 水を汲む儀式：人生の渇きへの回答

(1) 7:37~38

Joh 7:37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。

Joh 7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

- (2) イエスを信じることによって、人生の渇きは癒やされる。
 - ①霊的渇き(神との関係)
 - ②感情的渇き(愛、心の平安、隣人との交流)
 - ③知的渇き(人生の意味や真理の探究)
 - ④物質的渇き(神の恵みに対する依存)

2. ランプに火を灯す儀式：人生の不安への回答

(1) 8:12

Joh 8:12 イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」

- (2) イエスを信じることによって、人生の闇は消される。
 - ①罪とその支配
 - ②悪魔の支配
 - ③霊的無知と真理からの分離
 - ④死と永遠の裁きへの恐怖

ヨハネの福音書(24)

唯一の救い主イエス

ヨハ8:21~30

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④ サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥ 2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦ 後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧ 3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - ⑨ 世の光に関する説教(8:12~59)
 - * 世の光イエス(8:12~20)
 - * 唯一の救い主イエス(8:21~30)
 - * 解放者イエス(8:31~59)

2. 注目すべき点

- (1) 場面は、十字架にかかる半年前の仮庵の祭りである。
- (2) 「いのちの水」への招きの後、指導者たちによる迫害が激化する。
- (3) 「世の光」の説教は、7つの説教の中の5番目である。

3. アウトライン

- (1) 対話(1) (21~22節)
- (2) 対話(2) (23~25節 a)
- (3) 対話(3) (25b~27節)
- (4) 対話(4) (28~30節)

4. 結論

- (1) 信仰とは何か。
- (2) 指導者の権威の限界とは何か。
- (3) 信仰を告白する者はすべて救われているか。

イエスとパリサイ人たちの対話について学ぶ。

I. 対話(1) (21~22節)

1. 21節

Joh 8:21 イエスは再び彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜しますが、自分の罪の中で死にます。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。」

(1) イエスは将来自分の身に起こることを知っておられた。

①十字架、埋葬、復活、昇天まで、すべてを予見しておられた。

②イエスは、父なる神のもとに行こうとしていた。

(2) **パリサイ人たちの悲劇**

①彼らは、自分の罪の中で死ぬ。

*「罪」ということばが単数形になっている。

*ここでは、イエスをメシアとして受け入れないことが罪である。

②彼らは、メシアを探し続ける。

*メシアはすでに来られ、彼らに語られた。

*今も、ユダヤ人たちはメシアを待っている。

③彼らは、イエスが行く所に来ることができない。

*イエスは父なる神のもとに戻られる。

④イエスを信じないで死ぬのは、罪の中で死ぬことである。

2. 22節

Joh 8:22 そこで、ユダヤ人たちは言った。「『わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません』と言うが、まさか自殺するつもりではないだろう。」

(1) ユダヤ人たちの誤解

①以前は、イエスが離散の地に行こうとしていると誤解した(7:35)。

②ここでは、イエスが自殺するつもりなのかと誤解している。

*ユダヤ教では、自殺は厳しく禁じられていた。

*自殺した者は、ゲヘナの奥深い所に投げ込まれると教えられていた。

(2) 彼らのことばには、皮肉が含まれている。

①イエスは、自分たちの追及を逃れるために、自殺するつもりなのか。

②もし自殺したなら、イエスはゲヘナの奥深い所に投げ込まれる。

③敬虔なユダヤ人の自分たちは、ゲヘナには行けない。

④彼らの反応は、罪の暗黒を示すものである。

II. 対話(2) (23~25節a)

1. 23~24節

Joh 8:23 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは下から来た者ですが、わたしは上から来た者です。あなたがたはこの世の者ですが、わたしはこの世の者ではありません。」

Joh 8:24 それで、あなたがたは自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。わたしが『わたしはある』であることを信じなければ、あなたがたは、自分の罪の中で死ぬことになるからです。」

(1) イエスの自殺を思いつくパリサイ人たちは、下(地上)から来た者である。

- ①地上的な範囲でしか発想することができない。
- ②それゆえ、彼らは「この世の者」である。

(2) イエスは、上(天)から来た者である。

- ①天的な真理を語っている。
- ②それゆえ、イエスは「この世の者」ではない。

(3) 同じ教えの反復(強調のため)

- ①イエスを信じない者は、「自分の罪の中で死ぬ」。
- ②ここでの「罪」は、複数形である。つまり、行為としての罪のことである。
- ③罪の原理は、種々の行為となって現れる。
- ④「わたしが『わたしはある』であることを信じなければ、」
 - *ギリシア語で「わたしはある(エゴウ・エイミ)」(I am.)である。
 - *イエスが神であり、救い主であることを信じないなら、という意味。

2. 25節a

Joh 8:25a そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれなのですか。」

(1) パリサイ人たちは混乱し、怒った。

- ①イエスの神性宣言に反発した。
- ②イエスを信じないなら罪の中で死ぬという教えに、反発した。
- ③「そんなことを言うとは、いったい自分を誰だと思っているのか」
- ④これは、イエスを冒とく罪に定めようとする質問である。

III. 対話(3) (25b~27節)

1. 25節b

Joh 8:25b イエスは言われた。「それこそ、初めからあなたがたに話していることではありませんか。」

(1) イエスは意図的に、「メシア」ということばを避けている。

- ①メシアは、政治的意味合いを持ったことばである。
- ②イエスは、これまで主張してきた内容に立って、答えている。
*メシアということばを避けて、自分がメシアであることを示している。
- ③イエスの教えと行動は、一致している(言行一致)。

2. 26節

Joh 8:26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わされた方は真実であって、わたしはその方から聞いたことを、そのまま世に対して語っているのです。」

- (1) 追加すべき教えはまだたくさんある。
 - ①彼らの罪を暴いたり、裁きを宣言したりすることなどがそれであろう。
 - ②しかしそれは、イエスがこの世に来た目的ではない。

- (2) イエスは、遣わした方の御心だけを伝える。
 - ①「わたしを遣わされた方」とは、父なる神のことである。
 - ②ユダヤ法の規定
*使者は、受けた命令の範囲内において、権威を行使することができる。

3. 27節

Joh 8:27 彼らは、イエスが父について語っておられることを理解していなかった。

- (1) イエスの教えは、比喩を用いた教えである。
 - ①公生涯のこの段階では、イエスの教えは比喩的なものになっている。
 - ②聴き手は、その教えの内容を理解することができない。
 - ③啓示が進めば進むほど、混乱が増す。

- (2) 彼らは、父のことを知らないので、イエスのことを知らない。
 - ①逆も真なり。イエスのことを知らないので、父のことを知らない。

IV. 対話(4) (28~30節)

1. 28節

Joh 8:28 そこで、イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げたとき、そのとき、わたしが『わたしはある』であること、また、わたしが自分からは何もせず、父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していたことを、あなたがたは知るようになります。」

- (1) イエスは、再び預言を語る。
 - ①パリサイ人たちがイエスの本質を知るタイミングは、十字架の時である。
 - ②「人の子を上げる」とは、十字架に付けるという意味である。

(2) 十字架の死は、イエスの本質を啓示する。

- ①すべての人が救われるという意味ではない。
- ②地震、暗黒、復活などが、イエスは神であることを示す。
- ③イエスは、「わたしはある」(I am.)である。

2. 29節

Joh 8:29 わたしを遣わした方は、わたしとともにおられます。わたしを一人残されることはありません。わたしは、その方が喜ばれることをいつも行うからです。」

(1) このことばは、父とイエスが一体であることを示している。

- ①人から拒否されても、父なる神はイエスから離れない。
- ②16:32

Joh 16:32 見なさい。その時が来ます。いや、すでに来ています。あなたがたはそれぞれ散らされて自分のところに帰り、わたしを一人残します。しかし、父がわたしとともにおられるので、わたしは一人ではありません。

- ③私たちは、自分を喜ばせたり、人を喜ばせたりする場合がある。
- ④イエスはそうではない。

3. 30節

Joh 8:30 イエスがこれらのことを話されると、多くの者がイエスを信じた。

(1) 多くの者がイエスを信じた。

- ①その中には、本物の信者と、見せかけの信者がいる。
- ②いつの時代にも、これと同じことが起こる。

結論

1. 信仰とは何か。

(1) 8:23

Joh 8:23 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは下から来た者ですが、わたしは上から来た者です。あなたがたはこの世の者ですが、わたしはこの世の者ではありません。

- (2) 信仰とは、究極的な異文化体験である。
- (3) イエスを通して、天の御国がこの世に侵入してきたのである。
- (4) 私たちは、イエスのことば、行動、人格を通して、超自然の世界に触れる。
- (5) イエスを信じた人は、この世に生きながら、この世の者ではなくなる。
- (6) イエスを信じない者は、自分の罪の中で死ぬことになる。

2. 指導者の権威の限界とは何か。

(1) 8:26

Joh 8:26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わされた方は真実であって、わたしはその方から聞いたことを、そのまま世に対して語っているのです。」

(2) 遣わされた者は、遣わした者の代理として権威を行使する。

(3) その場合の権威の付与は、無制限ではない。

(4) 遣わした者の意図に従順であるという範囲内で、権威を与えられている。

①イエスは、父から聞いたことをそのまま世に対して語っている。

(5) 教会の霊的指導者にも同じことが言える。

①指導者の責務は、神の教えの全体を教えること。

②信者の責務は、忠実な指導者に従うこと。

3. 信仰を告白する者はすべて救われているか。

(1) 8:30

Joh 8:30 イエスがこれらのことを話されると、多くの者がイエスを信じた。

(2) 2:23

Joh 2:23 過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。

(3) 信仰が表面的なものなのか、救いに至るものなのか、吟味する必要がある。

(4) なぜ信仰から離れる人が出るのか。

①一時的な後退を経験するが、最後は立ち直る人がいる。

②立ち直らないなら、その人は最初から救われていなかったのである。

ヨハネの福音書 (25)

解放者イエス (1)

ヨハ 8 : 31~50

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1~18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19~12 : 50)
 - ①公生涯への序曲 (1 : 19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道 (2 : 1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問 (2 : 13~3 : 36)
 - ④サマリア伝道 (4 : 1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開 (4 : 43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問 (5 : 1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道 (6 : 1~7 : 9)
 - ⑧3度目のエルサレム訪問 (7 : 10~10 : 42)
 - ⑨世の光に関する説教 (8 : 12~59)
 - *世の光イエス (8 : 12~20)
 - *唯一の救い主イエス (8 : 21~30)
 - *解放者イエス (8 : 31~59)

2. 注目すべき点

- (1) 場面は、十字架にかかる半年前の仮庵の祭りである。
- (2) 「いのちの水」への招きの後、指導者たちによる迫害が激化する。
- (3) 「世の光」の説教は、7つの説教の中の5番目である。

3. アウトライン

- (1) 罪からの解放者 (31~39a 節)
 - (2) 悪魔からの解放者 (39b~50 節)
 - (3) 死からの解放者 (51~59 節)
- *私たちは、この箇所を通して解放者イエスに出会おうとしている。
*今回は (1) と (2) を取り上げ、次回は (3) を取り上げる。

4. 結論：奴隷と息子の霊的対比

イエスは、解放者である。

I. 罪からの解放者 (31~39a 節)

1. 31~32節

Joh 8:31 イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。」

Joh 8:32 あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

(1) 前回の箇所で、多くの者がイエスを信じた。

- ① イエスは、父と自分は常に一つであることを主張された(神性宣言)。
- ② その後の展開を見ると、彼らの信仰は表面的なものであることが分かる。
 - * 彼らはイエスに反発し、最終的には、イエスを殺そうとするようになる。
- ③ イエスは、信じた者を2分された。
 - * 見せかけの弟子(学ぶ者)：一時的で感情的な信仰を持つ者
 - * 本当の弟子(イエスに信頼する者)：継続的に従う信仰を持つ者
- ④ イエスは、信じた者たちに、神にしか言えないことを語る。

(2) 本当の弟子の特徴

- ① 「わたしのことばにとどまる」
 - * 「とどまる(μένω)」とは、「住む」「とまる」「継続する」。
- ② 「とどまる」の実例
 - * イエスの教えを信じ、従い続けること
 - * イエスの教えの中に生きること
 - * イエスのことばに信頼し、実践すること
 - * イエスと全人的につながっていること
 - * 単なる行為の積み重ねではなく、神の恵みにとどまること

(3) 本当の弟子が受ける祝福

- ① イエスのことばにとどまる人は、真理を知る。
- ② 真理はその人を自由にする。
- ③ この「真理」とは、イエス・キリストご自身である(14:6)。
- ④ 「真理」は、罪の束縛からの自由をもたらす(8:34~36)。

2. 33節

Joh 8:33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」

(1) ユダヤ人たちの反発

- ① 「真理はあなたがたを自由にします」と聞いて、反発した。
- ② 「今までだれの奴隷になったこともありません」

*これは明らかに歴史的事実と矛盾している。

*エジプト、バビロン、ペルシア、ギリシア、ローマの支配下に置かれた。

③彼らには、霊的な誇りがあった。

(2) ユダヤ人たちの霊的誇り

①アブラハムの子孫としての特権意識を強く持っていた(ロマ9:4~5)。

②政治的に支配されても、霊的には自由な神の民であると考えていた。

③「奴隷」とは、霊的・道徳的に墮落した異邦人の状態を意味した。

④彼らは、自分たちが罪と悪魔の奴隷であることに気付いていなかった。

⑤今も、霊的誇りを持っている人は福音に反発する。

3. 34~36節

Joh 8:34 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。

Joh 8:35 奴隷はいつまでも家にはありませんが、息子はいつまでもいます。

Joh 8:36 ですから、子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由になるのです。

(1) イエスは、奴隷と息子を対比された。

①奴隷とは、罪の奴隷のことである。

②罪が擬人法で語られている。

③ロマ6:23

Rom 6:23 罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

(2) 奴隷と息子の身分の違い

①奴隷(デューロス)は、一時的な存在である。

*主人の家に仕えるが、永続的な地位を持たない。

*いつでも売られたり、追放されたりする可能性がある。

*「罪の奴隷」は神の家から追放され、滅びに至る(8:24、ロマ6:23)。

②息子(ヒュイオス)は、永遠に家にとどまる。

*家の正当な相続人であり、永遠にその家にいる権利を持っている。

*イエスは、ご自身を「子」(ヒュイオス)として示している。

*「子によって自由にされた者だけが神の家にとどまる」と教える。

*「アブラハムの子孫である」との誇りだけでは、自由にはならない。

4. 37~38節

Joh 8:37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかし、あなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。

Joh 8:38 わたしは父のもとで見たことを話しています。あなたがたは、あなたがたの父から聞いたことを行っています。」

(1) イエスは、彼らがアブラハムの肉体的子孫であることを認めている。

- ①しかし、彼らはアブラハムの信仰を持っていない。
- ②なぜなら、彼らはイエスを殺そうとしている。
- ③その理由は、イエスのことばが心に入っていないからである。

(2) イエスの父(神)とユダヤ人たちの父(サタン)の対比

- ①イエスは父のもとで見たことを話している。
*イエスと父は、一つである(イエスの神性宣言)
- ②ユダヤ人たちは、彼らの父から示されたことを行っている。
*彼らの父が誰かは、まだ示されていないが、予測はつく。

5. 39節 a

Joh 8:39a 彼らはイエスに答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」

(1) 彼らは再度、アブラハムと自分たちの肉体的つながりを主張した。

- ①これは、霊的アイデンティティの主張でもある。
- ②彼らは、「血統」によるアブラハムの子孫であることを誇りにした。
- ③そのことを救いの保証と考えていた。

II. 悪魔からの解放者(39b~50節)

1. 39b~41節 a

Joh 8:39b イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行うはずですが。」

Joh 8:40 ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに語った者であるわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことをしませんでした。

Joh 8:41a あなたがたは、あなたがたの父がすることを行っているのです。」

(1) ユダヤ的家族観に基づく議論

- ①「子ども」は、父親のように考え、父親のように行動するものである。
- ②しかし、ユダヤ人たちはアブラハムのように行動していない。
- ③彼らは、神から聞いた真理を話しているイエスを殺そうとしている。
- ④アブラハムは、神を信じ、義とされた。
- ⑤ユダヤ人たちは、アブラハムではない別の「父」のわざを行っている。

⑥その父とは悪魔であることが、暗示されている。

2. 41節b

Joh 8:41b すると、彼らは言った。「私たちは淫らな行いによって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神がいます。」

(1) ユダヤ人たちは、自分たちは不品行によって生まれた者ではないと言う。

①これは、偶像礼拝をしたことがないという主張である。

*異邦人のような偶像礼拝の民ではないという主張である。

②さらに、イエスが不品行から生まれたことを示唆している可能性もある。

(2) 「私たちにはひとりの父、神がいます」

①自分たちこそ神の選ばれた民であり、靈的に正しい立場にある。

②自分たちは、いつも神だけを礼拝してきた。

3. 42~43節

Joh 8:42 イエスは言われた。「神があなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。わたしは神のもとから来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わされたのです。」

Joh 8:43 あなたがたは、なぜわたしの話が分からないのですか。それは、わたしのことばに聞き従うことができないからです。」

(1) ユダヤ人の家族制度からの議論

①家族の間には愛がある。

②神が父なら、彼らは父を愛するはずである。

③父を愛するなら、父が派遣した者を愛するはずである。

④イエスを拒絶することは、神を拒絶することと同じである。

(2) イエスのことばを理解できないのは、知的問題ではなく、靈的問題である。

①生まれながらの人間は、御霊に属することを受け入れない(1コリ2:14)。

②これは単なる言語の問題ではなく、靈的な拒絶の問題である。

③真に神の子であるなら、イエスを愛し、受け入れるはずである。

④これは、現在の私たちの信仰にも適用できる。

4. 44節

Joh 8:44 あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。彼のうちには

真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。

(1) ここでイエスは、彼らの父が悪魔であることを明らかにする。

- ①悪魔に見習っているという意味で、悪魔は父なのである。
- ②悪魔は、偽りの父である。

5. 45~46節

Joh 8:45 しかし、このわたしは真理を話しているので、あなたがたはわたしを信じません。

Joh 8:46 あなたがたのうちのだれが、わたしに罪があると責めることができますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。

(1) イエスは「罪なき人」として来られたメシア(2コリ5:21、ヘブ4:15)。

- ①イエスに罪があると責める者はいない。
- ②イエスは、モーセの律法に違反していない。
- ③もし罪を犯していたなら、彼の証言やメシアとしての資格は無効になる。

(2) イエスは、「真理を話している」と断言している。

- ①「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(14:6)
- ②それでも信じないのは、「権威や伝統」を愛していたから(5:39~40)。

6. 47節

Joh 8:47 神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」

(1) 真理に対する拒絶は、心の問題であり、霊的な問題である。

- ①神から出た者は、神のことばに聞き従う。
- ②神のことばに聞き従わないのは、神から出た者ではないからである。

7. 48節

Joh 8:48 ユダヤ人たちはイエスに答えて言った。「あなたはサマリア人で悪霊につかわれている、と私たちが言うのも当然ではないか。」

(1) 正しく反論できないと、罵倒することばが出てくる。

- ①ラビ的悪霊論によれば、悪霊の長は「ショムロニ」である。
- ②ヘブル語では、これはサマリア人か悪霊を指すことばである。
 - *ギリシア語では「サマリテース」である。
 - *ここでの会話は、ヘブル語かアラム語で行われた。
- ③イエスをサマリア人と呼ぶのは、悪霊につかわれているという意味である。
- ④「サマリア人=異端者=悪霊の影響を受けた者」という偏見を持っていた。

8. 49~50節

Joh 8:49 イエスは答えられた。「わたしは悪霊につかれています。むしろ、わたしの父を敬っているのに、あなたがたはわたしを卑しめています。

Joh 8:50 わたしは自分の栄光を求めません。それを求め、さばきをなさる方がおられます。

(1) イエスの応答

- ①彼らの非難を明確に否定した。
- ②イエスの教えや行動は、すべて父なる神に対する敬意と従順の表れである。
- ③彼らはイエスを神の御子として認めず、むしろ誹謗中傷し、攻撃している。
 - * 神を敬うべきはずのユダヤ人が、御子を侮辱しているという逆説。
 - * 「神のことばを語る者はしばしば拒絶される」(預言者たちのパターン)
- ④イエスには、自己顕示欲や承認欲求はない。
 - * 父の栄光だけを求めている。
- ⑤父がイエスを信じない者を裁かれる。

結論：奴隷(罪の奴隷)と息子(神の子)の霊的対比

1. 自己的努力によって正しくなろうとする vs. 恵みと信仰によって義とされる
2. 罪に支配されている vs. キリストによって自由にされている
3. 罪をやめたくてもやめられない vs. 罪から解放され、光の中を歩んでいる
4. 神の家に住む権利がない vs. 神の家の相続人とされている
5. 立場が不安定である vs. 神の家族の一員とされている
6. 本当の平安と希望がない vs. 永遠のいのちの希望を持つ

ヨハネの福音書(26)

解放者イエス(2)

ヨハ8:51~59

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④ サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥ 2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦ 後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧ 3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - ⑨ 世の光に関する説教(8:12~59)
 - * 世の光イエス(8:12~20)
 - * 唯一の救い主イエス(8:21~30)
 - * 解放者イエス(8:31~59)

2. 注目すべき点

- (1) 場面は、十字架にかかる半年前の仮庵の祭りである。
- (2) 「いのちの水」への招きの後、指導者たちによる迫害が激化する。
- (3) 「世の光」の説教は、7つの説教の中の5番目である。

3. アウトライン

- (1) 罪からの解放者(31~39a節)
 - (2) 悪魔からの解放者(39b~50節)
 - (3) 死からの解放者(51~59節)
- * 私たちは、この箇所を通して解放者イエスに出会おうとしている。
- * 今回は、(3)を取り上げる。

4. 結論:3つの教訓

イエスは、死からの解放者である。

III. 死からの解放者(51~59節)

1. 51節

Joh 8:51 まことに、まことに、あなたがたに言います。だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を見ることがありません。」

(1) この宣言は、非常に重要である。

- ①「まことに、まことに、」は「アーメン、アーメン」である。
- ②ヘブル語で、「真実である」「確かである」「そうである」の意味。
- ③重要な宣言の前に、注意を喚起するために用いられる。
- ④2重のアーメンは、ヨハネの福音書だけのもの(25回)。

(2) この宣言は、福音そのものである。

- ①「その人はいつまでも決して死を見ることがありません」
 - *この死は、肉体の死ではなく、第二の死(永遠の死)である。
 - *第二の死とは、永遠に神から切り離されることである。
 - *ヨハ3:16では、「滅びる」と表現される状態である。
- ②「だれでもわたしのことばを守るなら」
 - *ヨハ8:31では、「わたしのことばにとどまるなら」と言われていた。
 - *「ことばを守るなら」とは、業による救いのことではない。
 - *これは、イエスを信じた結果生まれる行為を意味している。
- ③このような宣言ができるのは、神しかいない。
 - *イエスのことばには権威がある。
 - *イエスを信じる者は、イエスのことばにとどまる。
 - *その人は、第二の死から解放されている。

2. 52節

Joh 8:52 ユダヤ人たちはイエスに言った。「あなたが悪霊につかれていることが、今分かった。アブラハムは死に、預言者たちも死んだ。それなのにあなたは、『だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を味わうことがない』と言う。」

(1) ユダヤ人たちは、「死を見ることがありません」を肉体的死と誤解した。

- ①アブラハムや預言者たちでさえも死んだ。
- ②信仰者でも死ぬという矛盾を、どう説明するのか。
- ③イエスは、悪霊につかれている。
- ④以前よりも深く、イエスが悪霊につかれていることを確信した。

3. 53節

Joh 8:53 あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのか。アブラハムは死んだ。預言者たちも死んだ。あなたは、自分を何者だと言うのか。」

- (1) この質問は、「ノー」という回答を予想する形になっている。
- ①イエスが「私たちの父アブラハム」よりも偉大であるはずがない。
 - ②アブラハムや預言者たちは死んだ。
 - ③彼らは、他人を救うどころか、自分自身を死から救うことさえできなかった。
 - ④なのに、イエスは他人を死から救うことができると教えている。
 - ⑤イエスは、自分のことをだれだと思っているのか。
 - ⑥イエスは、自分が目立つために活動しているのだろう。
- (2) ここには、2重の誤解がある。
- ①イエスは、アブラハムよりも偉大である。
 - ②イエスは、自分に関心を向けさせるために働いているのではない。

4. 54節 a

Joh 8:54a イエスは答えられた。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光は空しい。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。」

- (1) イエスは、ユダヤ人たちの誤解を解く。
- ①ヨハ8:50でイエスは、自分で自分の栄光を求めないと言われた。
 - ②自分で自分に栄光を帰すなら、それはむなしいものである。
 - ③父なる神がイエスを弁護し、イエスに栄光を与える。

5. 54b~55節

Joh 8:54b この方を、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。

Joh 8:55 あなたがたはこの方を知らないが、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしもあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っていて、そのみことばを守っています。

- (1) イエスは、ユダヤ人たちのことを偽り者と呼ぶ。
- ①彼らは、天の父を「私たちの神である」と言っている。
 - ②これは、神との契約関係を示すことばである。

*申6:4

Deu 6:4 聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。

- ③ユダヤ人たちは、自分たちだけが唯一の神を知っていると思っていた。
 - *しかし、彼らは天の父を知らない。
- ④彼らは、神を「私たちの神」と呼びながらも、神の御子を拒んでいた。
- ⑤表面的には神を知っていると言いながら、実際には知らない状態にあった。
- ⑥彼らは、偽り者である。
 - *彼らの父は「悪魔」である。

*父が偽り者なので、彼らもまた偽り者となる。

(2) しかし、イエスは偽り者ではない。

- ①イエスは父を知っており、そのみことばを守っている。信じる=守る。
- ②ユダヤ人たちは、イエスが父と同等でない信じていた。
- ③しかし、イエスの場合は、もし父を知らないと言うなら偽り者となる。

6. 56節

Joh 8:56 あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見るようになることを、大いに喜んでいました。そして、それを見て、喜んだのです。」

(1) 彼らがアブラハムに言及したので、イエスはそれに応答する。

- ①「あなたがたの父アブラハム」とは、肉体的な関係のことである。
- ②「わたしの日」はメシア到来のことであり、メシアがもたらす救いのこと。

(2) アブラハムはいつ、それを見て喜んだのか。

①ユダヤ教の伝統が強調すること

*イスラエルを抑圧する諸帝国と、その先のメシア時代の啓示を受けた。

②創12:3の中に、それを見たのかもしれない。

Gen 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、／あなたを呪う者をのろう。／地のすべての部族は、／あなたによって祝福される。」

③あるいは、イサクを献げたときに、それを見たのかもしれない。

*イサク奉獻は、メシアの死と復活の予表である。

*アブラハムは、信仰によってそのことを理解した。

7. 57節

Joh 8:57 そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのに、アブラハムを見たのか。」

(1) ユダヤ人たちの誤解

- ①イエスは、アブラハムを見たとは言っていない。その逆である。
- ②彼らは、イエスとアブラハムが同時代人であるはずがないと考えた。
- ③イエスの当時の年齢は、33歳前後である。
- ④当然、50歳にはなっていない。
- ⑤50歳は、祭司としての役割を終える年齢である。
- ⑥老年の象徴の年齢である。まだ老年にはなっていないという意味。

8. 58節

Joh 8:58 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」

- (1) ここでも、「アーメン、アーメン」が出てくる。
 - ①「わたしはある」は、イエスによる神性宣言である。
 - ②イエスの永遠性が啓示されている。
 - ③出3:14に登場する神の自己紹介と密接に関係している。

Exo 3:14 神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところに遣わされた、と。」

- ④イエスは、明確な神性宣言をされた。
- ⑤「わたしはアブラハムよりも前から存在していた」だけでなく、「わたしは神そのものである」。

9. 59 節

Joh 8:59 すると彼らは、イエスに投げつけようと石を取った。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。

- (1) 今度は、誤解はなかった。
 - ①イエスは、自分が神だと主張された。
 - ②ユダヤ的には、自分はメシアだと宣言しても、冒瀆罪に当たらない。
 - ③しかし、自分を神と等しくすることは冒とく罪に当たる。
 - ④そこで彼らは、イエスに石を投げつけようとした。
 - ⑤神殿は工事中なので、投げられるような石が多数あった。
- (2) 石を投げられそうになった旧約聖書の人々
 - ①モーセ(出17:4)
 - ②ヨシュアとカレブ(民14:10)
 - ③ダビデ(1サム30:6)
- (3) しかし、彼らはイエスを逮捕することができなかった。
 - ①十字架の時がまだ来ていなかったから。

結論：3つの教訓

1. イエスは、誰か。

- (1) 単なる教師ではなく、神ご自身である。
- (2) イエスは「わたしはある」と宣言された。
- (3) イエスは真の神であり、私たちの信仰の中心である。

(4) イエスを見た者は、神を見たのである。

2. イエスのことばを守るとは、どういう意味か。

- (1) イエスのことばを守るということは、信じ、行うことである。
- (2) 神のことばを守る者は「決して死を見ることがない」。
- (3) ここでの「死」は、肉体の死ではなく、第二の死（最終的な裁き）である。
- (4) イエスのことばを守る者は、霊的に生きる（神との交わり）。

3. キリスト教とは、何か。

- (1) キリスト教とは、知識の体系ではなく、イエスとの生ける関係である。
- (2) ユダヤ人たちは、神を知っているつもりでいたが、そうではなかった。
- (3) 形式的な宗教や伝統ではなく、神との生きた関係が重要である。
- (4) 単に教会に通うことや宗教的な行いをすることが、信仰ではない。
- (5) イエス・キリストとの生ける関係を維持することが真の信仰である。

ヨハネの福音書(27)
「生まれつきの盲人の癒し(1)」
ヨハ9:1~12

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④ サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥ 2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦ 後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧ 3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - * 世の光に関する説教(8:12~59)
 - * 第6のしるし:生まれつきの盲人の癒やし(9章)

2. 注目すべき点

- (1) 十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- (2) 生まれつきの盲人の癒やしは、7つのしるしの第6番目。
- (3) これは、イエスのメシア性を示すメシア的奇跡である。
- (4) ヨハ8:12の宣言の直後に起きた奇跡である。

Joh 8:12 イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」

3. アウトライン

- (1) 奇跡の序章(1節)
- (2) 世の光としての使命(2~5節)
- (3) シロアムの池での奇跡(6~7節)
- (4) 証しの始まり(8~12節)

4. 結論:今日の信者への適応

イエスは世の光であり、彼に従う者は霊的に目が開かれる。

盲人の癒しのステップを見れば、それが分かる。

I. 奇跡の序章(1節)

1. 1節

Joh 9:1 さて、イエスは通りすがりに、生まれたときから目の見えない人をご覧になった。

(1) 盲人は、他者の慈善によってしか生きる道はなかった。

① 神殿に近い場所が、最も収入を得られる場所である。

② 使3:2では、生まれつき足のなえた人が、「美しの門」に置かれていた。

(2) 「イエスは……ご覧になった」

① イエスが盲人を見つけた。

② 神の働きは、人間の求めに先立ってなされる。

* ヨハ5:6のベテスダの池での癒し

* ロマ5:8の「私たちがまだ罪人であったときに」

③ 盲人は、霊的な盲目を象徴している。

* ヨハネの福音書では、「光」と「闇」のテーマが頻繁に登場する。

* 光(イエス・キリスト)を受け入れない人は、「霊的な盲目」状態にある。

* 「肉体的な視力の回復」と「霊的な目が開かれること」の関係(ヨハ9章)

II. 世の光としての使命(2~5節)

1. 2節

Joh 9:2 弟子たちはイエスに尋ねた。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」

(1) ユダヤ人たちは、因果応報的な考え方をしていた。

① 病気や障害は、本人またはその先祖の罪の結果だと考えられていた。

(2) 弟子たちは、二択の質問をした。

① 彼自身の罪のゆえに、盲目に生まれついたのか。

* 胎児には、善の性質と悪の性質が与えられている。

* 悪の性質が勝つと、敵意をもって母親の腹を蹴飛ばすようになる。

* これは、両親を敬わない罪である。

* エサウとヤコブは、胎内で争った(創25:22)。

② 両親の罪のゆえに、盲目に生まれついたのか。

* もしそうなら、彼は不当に罰を受けていることになる。

(3) イエスは、第3の答えを持っておられる。

①過去の原因探しよりも、神が苦難をどのように用いられるかを考えるべき。

2. 3節

Joh 9:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。」

(1) イエスは、因果応報を否定された。

①人間が苦しみを経験する根本的な理由は、アダムの墮落にある。

*人間は、原罪を持って生まれてくる(ロマ5:12)。

②この盲人のケースは、「特定の罪の結果としての罰」ではない。

*それは、神の計画の一部としての苦しみである。

*神は、この人が盲目で生まれることを許された。

*神のわざがこの人に現れるためである。

(2) イエスは、新しい視点を提供された。

①この文脈での「神のわざ」とは何か。

*肉体的な癒しによって神の力が示されること

*霊的な目が開かれること(信仰に至ること)

3. 4~5節

Joh 9:4 わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを、昼のうちに行わなければなりません。だれも働くことができない夜が来ます。

Joh 9:5 わたしが世にいる間は、わたしが世の光です。」

(1) 日常的な体験を用いた教え

①夜間に働いているのは、城壁の見張り人か、羊飼いくらいである。

②人は、昼の間に働き、夜は休む。

(2) 「わたしたちは」

①イエスの働きが弟子たちにも委ねられていることを示唆している。

②イエスの地上での働きは限られていたが、その後の伝道は教会が引き継ぐ。

(3) イエスにとっては、昼の間とは、公生涯の期間である。

①イエスは、十字架の時が迫っていることを知っておられた。

②時が与えられている間に、自分を遣わしてくださった父なる神のわざを行う。

③イエスは、「わたしが世の光」であることを示すためにこの盲人を癒す。

④十字架の時、イエスの働きは一時的に終わる(弟子たちも散る)。

⑤しかし、復活後、弟子たちが聖霊を受けて再び働きを開始する(使2章)。

III. シロアムの池での奇跡(6~7節)

1. 6節

Joh 9:6 イエスはこう言ってから、地面に唾をして、その唾で泥を作られた。そして、その泥を彼の目に塗って、

(1) イエスは、唾で泥を作られた。

① アダムは、地のちりから造られた。それと同じ物質である。

* 盲人の癒やしは、霊的な再生の象徴である。

② 「唾」には治癒の力があると信じられていた。

* この盲人が「信仰を持つ」助けになった可能性が考えられる。

* この後、彼は、シロアムの池に行くように命じられる。

* 癒やしは、信仰と従順の行為を通して完成する。

(2) この方法は、パリサイ人たちとの論争を喚起するためのものである。

① イエスは、安息日に癒しを行おうとしている。

② 口伝律法では、安息日に行ってはならない癒しの方法が例示されている。

* 目にぶどう酒を塗る。

* 目に唾で作った泥を塗る。

2. 7節

Joh 9:7 「行って、シロアム(訳すと、遣わされた者)の池で洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗った。すると、見えるようになり、帰って行った。

(1) シロアムの池は、エルサレムの南端にある池である。

① ここには、ことば遊びがある。

* ヘブル語で「シロアム」は「遣わされた者」の意味である。

② イエスは、父なる神から遣わされて、御業を行っている。

③ 盲人がシロアムの池に行くことは、イエスへの信仰と従順の行為となる。

④ 水で洗うことは、霊的な清めや新しいいのちの象徴である。

(2) この池は、仮庵の祭りの期間、エルサレムで最もにぎやかな場所となっていた。

① この癒やしは、群衆が注目する中で行われた。

② 盲人は、イエスの命令通りに行い、癒やされた。

③ もしイエスがメシアなら、どうして安息日に癒やすのかという反発が起こる。

IV. 証しの始まり(8~12節)

1. 8~9節

Joh 9:8 近所の人たちや、彼が物乞いであったのを前に見ていた人たちが言った。「これは座って物乞いをしていた人ではないか。」

Joh 9:9 ある者たちは、「そうだ」と言い、ほかの者たちは「違う。似ているだけだ」と言った。当人は、「私がその人です」と言った。

- (1) 人違いではないかという議論が起こった。
 - ①盲人の様相が、激変したことがうかがわれる。

- (2) 当人は、自分がそれだと言い張った。
 - ①彼は、イエスの本質をまだ理解していない。
 - ②しかし、自分が癒された事実を大胆に宣言した。

2. 10~11節

Joh 9:10 そこで、彼らは言った。「では、おまえの目はどのようにして開いたのか。」

Joh 9:11 彼は答えた。「イエスという方が泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行って洗いなさい』と言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。」

- (1) 「目が開かれたこと」そのものより、「誰がそれをしたのか」が議論の中心になる。
 - ①これは、イエスのアイデンティティを問う質問である。
- (2) 彼は、事実をありのままに述べた。
 - ①「イエスという方」
 - *イエスを「主」や「神の子」とは認識していない。
 - *彼は盲人だったので、一度もイエスを見たことがない。
 - ②「それで、行って洗うと、見えるようになりました」
 - *イエスのことばに従った結果、奇跡が起こったことを強調している。

3. 12節

Joh 9:12 彼らが「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と答えた。

- (1) 「その人はどこにいるのか」
 - ①信仰による探求なのか、疑いによる追及なのか、明確ではない。
- (2) 「知りません」
 - ①見たことがないので、その人がどこにいるのか、知らない。
 - ②肉体的な目は開かれたが、霊的な目は閉ざされたままである。

③信仰は、成長するものである。

結論：今日の信者への適用

1. 試練の意味を神の視点で捉える。
 - (1) 試練は、神の栄光が現れる機会となる可能性がある。
 - (2) 試練に遭ったとき、神の計画がなんであるか祈り求めよう。

2. イエスの方法に信頼する。
 - (1) 癒やしはすぐには起こらなかった。
 - (2) 目に泥を塗られ、シロアムの池で洗うよう指示された。
 - (3) 盲人は、幾多の障害を乗り越えて、その指示に従った。
 - (4) 私たちの思いをはるかに超えた神の方法に信頼しよう。

3. 信仰が成長することを期待する。
 - (1) 盲人は、「イエスによって癒された」と証言した。
 - (2) イエスが誰なのか深く理解していなくても、自分の経験を証した。
 - (3) 周囲の人の反応に左右されなかった。

4. 奇跡は、「シロアムの池」で起こることを覚える。
 - (1) 「シロアム」は「遣わされた者」という意味(7節)。
 - (2) これは、イエスご自身を象徴している。
 - (3) 私たちの救いと導きは「遣わされたイエス」にある。

ヨハネの福音書(28)
「生まれつきの盲人の癒し(2)」
ヨハ9:13~41

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④ サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥ 2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦ 後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧ 3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - * 世の光に関する説教(8:12~59)
 - * 第6のしるし:生まれつきの盲人の癒やし(9章)

2. 注目すべき点

- (1) 十字架にかかる前の年の仮庵の祭り(半年前)
- (2) 生まれつきの盲人の癒やしは、7つのしるしの第6番目。
- (3) これは、イエスのメシア性を示すメシア的奇跡である。

3. アウトライン

- (1) 本人の尋問(13~17節)
- (2) 両親の尋問(18~23節)
- (3) 2度目の本人の尋問(24~34節)
- (4) 霊の目の癒し(35~41節)

3. 結論:今日の信者への適用

イエスは、私たちの霊の目を開くお方である。

1. 本人の尋問(13~17節)

1. 13~14節

Joh 9:13 人々は、前に目の見えなかったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。

Joh 9:14 イエスが泥を作って彼の目を開けたのは、安息日であった。

- (1) 群衆は、目が開いた人をパリサイ人たちのところに連れて行った。
 - ①群衆は、これを良い知らせと受け取り、指導者たちの裁定を仰ぐために動いた。
- (2) しかし、この癒やしは安息日に行われた。
 - ①パリサイ人たちは、安息日の癒しは律法違反だと考えていた。

2. 15~16節

Joh 9:15 こういうわけで再び、パリサイ人たちも、どのようにして見えるようになったのか、彼に尋ねた。彼は、「あの方が私の目に泥を塗り、私が洗いました。それで今は見えるのです」と答えた。

Joh 9:16 すると、パリサイ人のうちのある者たちは、「その人は安息日を守らないのだから、神のもとから来た者ではない」と言った。ほかの者たちは「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができるだろうか」と言った。そして、彼らの間に分裂が生じた。

- (1) この男は、自分の経験をそのまま証言した。
 - ①あの方が目に泥を塗ってくれた。
 - * 「あの方」と言っている。イエスは有名になっていた。
 - ②私が洗った。
 - ③そしたら、見えるようになった。
 - ④神の約束と人間の責務が表現されている。
- (2) パリサイ人たちの間に、意見の対立が起こった。
 - ①安息日を守らない者は、神から出た者ではない。
 - ②罪人である者に、このようなしるしを行うことはできない。

3. 17節

Joh 9:17 そこで、彼らは再び、目の見えなかった人に言った。「おまえは、あの人についてどう思うか。あの人に目を開けてもらったのだから。」彼は「あの方は預言者です」と答えた。

- (1) 彼らは、再度この男に質問した。
 - ①自分たちの間で分裂が起こっているから。
- (2) この男の信仰は成長している。
 - ①まだイエスを神とは信じていない。
 - ②しかし、預言者と認めている。
 - ・旧約聖書の預言者たちは、神から遣わされて奇跡を行った。

II. 両親の尋問(18~23節)

1. 18~19節

Joh 9:18 ユダヤ人たちはこの人について、目が見えなかったのに見えるようになったことを信じず、ついには、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、

Joh 9:19 尋ねた。「この人は、あなたがたの息子か。盲目で生まれたとあなたがたが言っている者か。そうだとしたら、どうして今は見えるのか。」

(1) パリサイ人たちは、癒やしが起こったことを信じたくなかった。

- ①何かの手違いがあったのではないか。
- ②両親なら、一番よく知っているはずだ。
- ③本人なのかどうか、また、どのようにして癒やされたのか。

2. 20~21節

Joh 9:20 そこで、両親は答えた。「これが私たちの息子で、盲目で生まれたことは知っています。

Joh 9:21 しかし、どうして今見えているのかは知りません。だれが息子の目を開けてくれたのかも知りません。本人に聞いてください。もう大人です。自分のことは自分で話すでしょう。」

(1) 両親は、責任を回避した。

- ①この男は、彼らの息子である。
- ②彼が、生まれつき盲目だったことは知っている。
- ③証言能力のある年齢なので、本人に聞いてほしい。

3. 22~23節

Joh 9:22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちの恐れからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。

Joh 9:23 そのため彼の両親は、「もう大人ですから、息子に聞いてください」と言ったのである。

(1) ユダヤ人たち(霊的指導者たち)は、イエスのメシア性を拒否していた。

- ①もしイエスをメシアだと告白するなら、会堂から追放すると決めていた。
- ②会堂から追放されると、経済的、社会的、宗教的基盤を失う。

(2) 会堂が行う懲戒の3つの段階

- ①Neziphah: 7日間の追放
- ②Niddui: 30日間の追放
- ③Cherem: 完全な追放と社会的な交流の断絶

(3) ヨハネの福音書の最初の読者の視点

- ①紀元70年までは、長老たちが共同体の中で裁き司の役割を担っていた。
- ②紀元70年以降、パリサイ人たちがその役割を担った。
- ③ヨハネの福音書は、紀元90年代に書かれた。
- ④最初の読者の多くは、シナゴグからの追放を経験していた。
- ⑤彼らは、シナゴグから追放されたが、イエスを礼拝する特権を得た。

III. 2度目の本人の尋問(24~34節)

1. 24~25節

Joh 9:24 そこで彼らは、目の見えなかったその人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの人が罪人であることを知っているのだ。」

Joh 9:25 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか私は知りませんが、一つのこと知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」

(1) 「神に栄光を帰しなさい」の意味について、2つの可能性がある。

- ①誓いを求める。「自分が嘘をついていたと認めよ」
- ②イエスに栄光を帰すことを禁じる。「癒しのゆえに、神をたたえよ」

(2) 彼は、知らないことと、知っていることを、区別して証言した。

- ①イエスが罪人かどうか、知らない。
- ②しかし、盲目であったのに、今は見えるということは知っている。

2. 26~27節

Joh 9:26 彼らは言った。「あの人はおまえに何をしたのか。どのようにしておまえの目を開けたのか。」

Joh 9:27 彼は答えた。「すでに話しましたが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのですか。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」

(1) 同じ質問を受けて、この男は苛つき始めた。

- ①話したが、聞いてもらえなかった。
- ②なぜもう一度聞こうとするのか。
- ③イエスの弟子になりたいのか。これは皮肉である。

(2) パリサイ人にとっては、これ以上の侮辱はない。

- ①無学な物乞いが、学のある自分たちに、意見している。
- ②しかも、自分たちが最も忌み嫌っている内容を口にしている。

3. 28~29節

Joh 9:28 彼らは彼をののしって言った。「おまえはあの者の弟子だが、私たちはモーセの弟子だ。」

Joh 9:29 神がモーセに語られたということを私たちは知っている。しかし、あの者については、どこから来たのか知らない。」

(1) この男の証言を崩せないで、証言している本人を攻撃する。

- ①お前はイエスの弟子だ。これは、最悪の罪である。
- ②自分たちは、モーセの弟子だ。これは、最高の特権である。
- ③神がモーセに語ったことは知っている。
- ④しかし、イエスがどこから来たかは知らない。

(2) 彼らの主張は矛盾である。

- ①モーセの教えを知っているなら、イエスをメシアと信じたはずである。
- ②モーセよりも偉大な方が彼らの前に現れたのに、その方を信じない。

4. 30~33節

Joh 9:30 その人は彼らに答えた。「これは驚きです。あの方がどこから来られたのか、あなたがたが知らないとは。あの方は私の目を開けてくださったのです。」

Joh 9:31 私たちは知っています。神は、罪人たちの言うことはお聞きになりませんが、神を敬い、神のみこころを行う者がいれば、その人の言うことはお聞きくださいます。

Joh 9:32 盲目で生まれた者の目を開けた人がいるなどと、昔から聞いたことはありません。

Joh 9:33 あの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできなかったはずですよ。」

(1) 彼は、皮肉から攻撃へ転じた(自立して考え始めている)。

- ①パリサイ人たちは、霊的指導者たちである。
- ②なのに、盲人の目を開けた方がどこから来たかを知らないという。
- ③恥を知れ。
- ④神は、罪人の言うことをお聞きにならない(ユダヤ教の教えの中心)。
- ⑤あの方が生まれつきの盲人の目を開けたのは、神から出ているからだ。

5. 34節

Joh 9:34 彼らは答えて言った。「おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちに教えるのか。」そして、彼を外に追い出した。

(1) 彼らは、再び、この男を虐待した。

- ①盲目に生まれついたことと、特定の罪を結びつけた。

②この男に教える資格はある。彼は体験したので、教える資格はある。

(2)「彼を外に追い出した」

①神殿の外ではなく、会堂から追い出したという意味である。

②これは、Cherem（完全な追放と社会的な交流の断絶）の段階である。

IV. 霊の目の癒し(35~41節)

1. 35~36節

Joh 9:35 イエスは、ユダヤ人たちが彼を外に追い出したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」

Joh 9:36 その人は答えた。「主よ、私が信じることができるよう教えてください。その人はどなたですか。」

(1) イエスが彼を見つけ出した。

①「あなたは人の子を信じますか」と尋ねた。

②彼は、まだイエスが誰かを知らない。霊の目はまだ開いていない。

2. 37~38節

Joh 9:37 イエスは彼に言われた。「あなたはその人を見えています。あなたと話しているのが、その人です。」

Joh 9:38 彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した。

(1) イエスは、あなたと話している私がメシアであると言われた。

①彼は、信仰によって応答した。

②ユダヤ人は、人を礼拝しない。

* イエスが癒やし主だという理由では、礼拝しない。

③イエスが神の子であると信じたので、礼拝している。

④彼は、肉の目も霊の目も開かれた。

3. 39節

Joh 9:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」

(1) イエスの奉仕の目的

①目が見えないと認める人は、目が見えるようになる。

②目が見えると思っている人は、盲目のままにとどまる。

4. 40~41節

Joh 9:40 パリサイ人の中でイエスとともにいた者たちが、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」

Joh 9:41 イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります。」

(1) 「私たちも盲目なのですか」は、傲慢な質問である。

①これは、否定的な回答を要求する質問である。

(2) イエスの回答

①自分が盲目だと認めていたなら、罪の程度は軽かっただろう。

②しかし、目が見えると言っているのですから、重い罪がそのまま残る。

結論：今日の信者への適用

1. 光と闇の隔たりは、時間とともに大きくなる。

(1) イエスは「世の光」として生まれつきの盲人の目を開いた。

(2) さらにイエスは、この男の霊の目も開いた。

(3) パリサイ人たちは、霊的な盲目のままであった。

(4) 偏見や先入観によって真実を見失うのは、悲劇である。

2. 愛は、形式主義に勝つ。

(1) パリサイ人たちは、安息日に癒しを問題視し、形式に固執した。

(2) イエスは、人々の必要に応えることを優先した。

(3) 愛は、形式や規則を乗り越える。

3. 神を体験した個人の証言には、力がある。

(1) 盲人であった男は、自身の体験をもとにイエスの力を証言した。

(2) 彼のシンプルで力強い証言は、周囲の人々に大きな影響を与えた。

(3) 霊的覚醒は、一人の人から始まる。

4. 私たちの信仰は、成長する。

(1) 男は、最初はイエスを「預言者」と認識していた。

(2) 後に「神からの人」と認識した。

(3) 最終的には「主」として信じ、礼拝した。

(4) 私たちの信仰も、段階的に成長する。

ヨハネの福音書(29)

「良い牧者のたとえ(1)」

ヨハ10:1~10

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④ サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥ 2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦ 後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧ 3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - ⑨ 良い牧者のたとえ(10:1~21)

2. 注目すべき点

- (1) 10章は、9章の盲人の癒しの出来事と密接に関連している。
- (2) イエスは、生まれつきの盲人を癒やした。パリサイ人たちは、彼を追放した。
- (3) このことを背景として、「良い牧者」と「盗人・強盗」のたとえ話が語られる。

3. アウトライン

- (1) 羊飼いと盗人(強盗)の対比(1~6節)
- (2) 羊の門と盗人(強盗)の対比(7~10節)
- (3) 良い牧者と雇い人の対比(11~18節)
- (4) 信じる者と信じない者の対比(19~21節)

*今回は、(1)と(2)を取り上げる。

3. 結論:今日の信者への適用

イエスは、良い牧者である。

4つの対比によって、それが明らかになる。

I. 羊飼いと盗人(強盗)の対比(1~6節)

1. 1節

Joh 10:1 「まことに、まことに、あなたがたに言います。羊たちの囲いに、門から入らず、ほかのところを乗り越えて来る者は、盗人であり強盗です。」

(1) 牧場の朝の情景が描かれる。

- ①「羊たちの囲い」とは、夜間に羊たちを囲っておく場所である。
- ②通常は、石垣で囲まれ、そこにイバラやアザミが生えている。
- ③門番がいて、夜の番をしている。
 - *獅子、ひょう、狼、熊、ジャッカル、などの野獣がいた。
- ④一つの囲いの中で、いくつもの羊たちの群れが休んでいる。
 - *羊たちは安心して休むことができる。
- ⑤朝になると、牧者は門から入り、自分の群れを連れ出す。

(2) 「まことに、まことに、あなたがたに言います」

- ①重要な真理を教える際の、常套句である。
- ②ここでの文脈は、生まれつきの盲人の癒しに続く教えである。
- ③聴衆は、その癒しを目撃したパリサイ人たちと群衆である。

(3) 「盗人であり強盗」

- ①ユダヤ教の律法では、盗人と強盗は区別される。
 - *盗人は家に押し入る。
 - *強盗は荒野に潜んでいて、旅人を襲う。
 - *イスカリオテのユダは盗人である(ヨハ12:6)。
 - *バラバは強盗である(ヨハ18:40)。
 - *イエスとともに十字架に付けられた2人も強盗である(マタ27:38、44)。
- ②牧者は、野獣だけでなく、人間の害にも注意を払う必要があった。

(4) 「羊たちの囲いに、門から入らず、ほかのところを乗り越えて来る者」

- ①「門」は、羊たちの囲いに入るための正当な手段や権威の象徴である。
- ②「門から入らず、ほかのところを乗り越えて来る者」は、パリサイ人たち。
 - *彼らは、盗人で強盗である。
 - *彼らは、口伝律法を用いて民を支配していた。
 - *ユダヤ人国家に力づくで侵入し、他人の財産を奪っていた。

2. 2節

Joh 10:2 しかし、門から入るのは羊たちの牧者です。

(1) これは、イエスのことである。

①イエスは、門から入る牧者である。

(2) イエスとパリサイ人たちの対比

①イエスは、旧約聖書の預言の成就として来られた。

②パリサイ人たちは、口伝律法を作り、牧者であるかのように振る舞った。

*彼らは、モーセの律法を知っていると言いながら、イエスを信じなかった。

*また、イエスを信じた人を会堂から追放した。

3. 3~4節

Joh 10:3 門番は牧者のために門を開き、羊たちはその声を聞き分けます。牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。

Joh 10:4 羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。

(1) 門番とは誰か。

①父なる神は、イエスを羊たちの群れに遣わした。

②旧約聖書の預言者たちは、イエスのメシア性を証明した。

③バプテスマのヨハネは、イエスの到来を告げる働きをした。

④聖霊は、イエスの働きを証しする。

(2) 門番を父なる神と解釈することが最も自然であろう。

①イエスは、父なる神の計画に従って働いている。

(3) 羊たちは、牧者の声を聞き分ける。

①癒された盲人は、パリサイ人たちの声ではなく、イエスの声に従った。

②パリサイ人たちは、彼を会堂から追放した。

③イエスは、彼を導いた。

(4) 牧者は、自分の羊の名を呼ぶ。

①複数の群れが同じ囲いの中にいることが分かる。

②牧者は、羊の特徴を把握している

*羊の顔や体の特徴を記憶し、傷や模様、行動のクセから識別できる。

*羊の性格や行動パターンも熟知しており、次の動きを予測できる。

(5) 牧者は、羊たちの先頭に立って行く。

①真の牧者は、羊を追い立てない。

②先頭に立って、教え、行動し、人格によって羊たちの群れを導く。

(6) 羊たちは、牧者の声を知っているので、ついて行く。

①羊たちは、聞き慣れた牧者の声を識別し、それ以外の声は警戒する。

②現代の中東の牧者も、特定の声や笛の音を使って、群れを導いている。

4. 5節

Joh 10:5 しかし、ほかの人には決してついて行かず、逃げて行きます。ほかの人たちの声は知らないからです。」

(1) 「ほかの人たち」

①盗人と強盗

②別の群れの牧者

③ここでは、パリサイ人たちのことである。

(2) 2重の拒否が表明されている。

①決してついて行かない。

②逃げて行く。

③牧会者のゴールは、羊たちを育てることである。

*みことばを教えることで、羊が真の牧者の声を聞き分けるようにする。

④ヨハネの福音書の読者は、羊と自分を重ね合わせたことであろう。

*彼らの多くが、会堂から追放されていた。

*それは悲劇ではなく、「ほかの人」から逃げ出したことなのである。

5. 6節

Joh 10:6 イエスはこの比喻を彼らに話されたが、彼らは、イエスが話されたことが何のことなのか、分からなかった。

(1) イエスは、このたとえ話をパリサイ人たちに話した。

①彼らは、理解しなかった。

②牧者を軽蔑していたので、自分のこととは思わなかった。

③イエスの羊たちではないので、その声を聞き分けることができない。

II. 羊の門と盗人(強盗)の対比(7~10節)

1. 7~9節

Joh 10:7 そこで、再びイエスは言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしは羊たちの門です。

Joh 10:8 わたしの前に来た者たちはみな、盗人であり強盗です。羊たちは彼らの言うことを聞きませんでした。

Joh 10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけます。

(1) ここから新しい比喩が用いられる。

①「まことに、まことに、…」は、新しい比喩の始まりを示している。

②ヨハ10章には、2種類の門がある。

* 囲いの門(1~2節)

* 羊の門(7節)

(2) 牧者に導かれた羊たちの群れは、牧草のある場所に来る。

①そこに、羊の囲い地がある。

②羊は、羊の門を使ってその囲い地に入ったり出たりする。

(3) イエスが、神の国に入るための門である。

①イエスよりも前に来た霊的指導者たちは、盗人で強盗である。

②イエスは、文字通りの門ではない。

③イエスの役割と、門の役割に、相関関係があるということである。

④この方以外に、救いはない。

(4) 「出たり入ったりして、牧草を見つけます」

①キリストの救いによって、神の守りと自由の中で生きることができる。

②キリストにある霊的な糧(みことば、聖霊の導き、平安)によって満たされる。

③信者は、安心して生活し、真の満足を得ることができる。

2. 10節

Joh 10:10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。

(1) 盗人の動機は、羊を搾取することである。

①自分の利益のために、羊を殺すことさえする。

(2) イエスは、奪うためではなく、与えるために来られた。

①福音の三要素を受け入れ、イエスをそのような方と信じる。

②その瞬間から、新しいいのちが始まる。

③新しいいのちは、豊かに持つ段階へと進む。

結論：今日の信者への適用

1. イエス・キリストだけが救いの道である。

(1) ヨハ10:9

Joh 10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけます。

(2) 使4:12

Act 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

①偽の牧者から迫害されているペテロとヨハネの証言である。

(3) 宗教的な形式主義や行いによる道では、救われない。

2. 偽教師や偽リーダーに注意しよう。

(1) ヨハ10:8

Joh 10:8 わたしの前に来た者たちはみな、盗人であり強盗です。羊たちは彼らの言うことを聞きませんでした。

(2) 1ヨハ4:1

1Jn 4:1 愛する者たち、霊をすべて信じてはいけません。偽預言者がたくさん世に出て来たので、その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい。

(3) 偽教師、異端、ニューエイジ思想、繁栄の神学などが、真理をゆがめている。

(4) 教会のリーダーや牧師は、羊を愛し、正しい教えを語る努力をする。

3. キリストにある平安と霊的満たしを求めよう。

(1) ヨハ10:9

Joh 10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけます。

(2) 悩み多き時代にあっても、キリストにある者は、自由に生きることができる。

(3) 主の御心に従って生きるなら、物質的にも霊的にも養われる。

(4) 教会に集うことの重要性を認識しよう。

(5) ヘブ10:25

Heb 10:25 ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょ。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。

ヨハネの福音書(30)
「良い牧者のたとえ(2)」
ヨハ10:11~21

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - ⑨良い牧者のたとえ(10:1~21)

2. 注目すべき点

- (1) 10章は、9章の盲人の癒しの出来事と密接に関連している。
- (2) イエスは、生まれつきの盲人を癒やした。パリサイ人たちは、彼を追放した。
- (3) このことを背景として、「良い牧者」と「盗人・強盗」のたとえ話が語られる。

3. アウトライン

- (1) 羊飼いと盗人(強盗)の対比(1~6節)
- (2) 羊の門と盗人(強盗)の対比(7~10節)
- (3) 良い牧者と雇い人の対比(11~18節)
- (4) 信じる者と信じない者の対比(19~21節)

*今回は、(3)と(4)を取り上げる。

3. 結論:今日の信者への適用

イエスは、良い牧者である。

4つの対比によって、それが明らかになる。

Ⅲ. 良い牧者と雇い人の対比(11~18節)

1. 11節

Joh 10:11 わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。

(1) 良い牧者の特徴

- ①獅子、ひょう、狼、熊、ジャッカル、などの野獣がいた。
- ②良い牧者は、羊を守るために、命がけで戦う。
- ③なぜか。羊の所有者だからである。

(2) 良い牧者の実例

①ヤコブ(創31:38~40)

Gen 31:38 私があなたと一緒にいた二十年間、あなたの雌羊も雌やぎも流産したことはなく、また私はあなたの群れの雄羊も食べませんでした。

Gen 31:39 野獣にかみ裂かれたものは、あなたのもとへ持って行かずに、私が負担しました。それなのに、あなたは昼盗まれたものや夜盗まれたものについてまでも、私に責任を負わせました。

Gen 31:40 私は昼は暑さに、夜は寒さに悩まされて、眠ることもできませんでした。

②ダビデ(1サム17:34~36)

1Sa 17:34 ダビデはサウルに言った。「しもべは、父のために羊の群れを飼ってきました。獅子や熊が来て、群れの羊を取って行くと、

1Sa 17:35 しもべはその後を追って出て、それを打ち殺し、その口から羊を救い出します。それがしもべに襲いかかるようなときは、そのひげをつかみ、それを打って殺してしまいます。

1Sa 17:36 しもべは、獅子でも熊でも打ち殺しました。この無割礼のペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょう。生ける神の陣をそしたのですから。」

- ③イエスは、この系譜に属する良い牧者であるが、それ以上である。

(3) 「わたしは良い牧者です」

- ①「わたしはある」(出3:14)を思い出させるイエスの神性宣言である。
- ②「良い」は「カロス」であるが、「本質的に立派」「理想的な」という意味。
- ③イエスは、「理想的な、究極の羊飼い」である。

(4) 「良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます」

- ①「捨てる」は「テイテーミ」であるが、能動的に命を献げるという意味。
- ②イエスの自発的な死が強調されている。
- ③これは、十字架の死を覚悟したことばである。

2. 12~13節

Joh 10:12 牧者でない雇い人は、羊たちが自分のものではないので、狼が来るのを見ると、置

き去りにして逃げてしまいます。それで、狼は羊たちを奪ったり散らしたりします。

Joh 10:13 彼は雇い人で、羊たちのことを心にかけていないからです。

(1) 雇い人の特徴

- ①賃金のために働いているので、羊がどうなっても気にしない。
- ②自分の身の安全が第一なので、危険が迫ると逃げて行く。
- ③「逃げる」は「フェイガイ」であるが、「責任放棄」を意味する。
- ④その結果、羊は奪われ、群れは散らされる。

(2) 雇い人の実例

- ①利己的な王たち、利己的な祭司たち、偽預言者たち。
- ②狼は、敵対者の象徴(サタンや異端的な指導者)である(使20:29)。
- ③神の羊の群れは、常に「牧者でない雇い人」によって苦しめられてきた。
- ④エレ10:21~22

Jer 10:21 牧者たちは愚かで、【主】を求めなかった。／それゆえ、彼らは栄えず、／彼らが飼うものはみな散らされる。

Jer 10:22 声がある。見よ、一つの知らせが届いた。／大いなるざわめきが北の地から来る。／ユダの町々を荒れ果てた地とし、／ジャッカルに住みかとするために。

- ⑤ゼカ11:4~17

(3) パリサイ人たちは、この系譜に属する雇い人たちである。

- ①彼らの教えを、軽く考えてはならない。
- ②パリサイ的ユダヤ教は、民衆を滅びに導く教えである。
- ③彼らは、民衆から受けるお礼を期待して教えていた。

3. 14~15節

Joh 10:14 わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っており、わたしのものは、わたしを知っています。

Joh 10:15 ちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じです。また、わたしは羊たちのために自分のいのちを捨てます。

(1) 良い牧者は、自分の羊を知っている。

- ①自分の所有物である。
- ②注意深く見守っている。

(2) 羊は、所有者を知っている。

- ①相互関係に基づく知識である。

- ②「知る」は「ギノースコー」で、「親しい関係の中で知る」という意味。
- (3) その関係は、御父と御子の関係にたとえられる。
 - ①完べきな調和と一致がある。
 - ②イエスと父の関係と同じレベルの親密さで、信者とキリストが結ばれている。
- (4) 良い牧者は、羊のためにいのちを捨てる。
 - ①十字架の死の預言がくり返される。

4. 16節

Joh 10:16 わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらも、わたしは導かなければなりません。その羊たちはわたしの声に聞き従います。そして、一つの群れ、一人の牧者となるのです。

- (1) 「この囲いに属さないほかの羊たち」
 - ①「この囲いに属さない」という表現は、ユダヤ人以外の存在を指している。
 - ②これは、将来救われる異邦人信者たちである。
 - ③イエスの死は、異邦人を父なる神のもとに連れて行くようになる。
 - ④復活したイエスは、弟子たちを通して異邦人にも語りかける。
- (2) 「一つの群れ、一人の牧者となる」
 - ①これは、教会のことである。
 - ②教会は、ユダヤ人信者と異邦人信者からなる「新しいひとりの人」である。
 - ③教会の頭は、イエス・キリストである。
 - ④エペ3:6

Eph 3:6 それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。

5. 17~18節

Joh 10:17 わたしが再びいのちを得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛して下さいます。

Joh 10:18 だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。わたしはこの命令を、わたしの父から受けたのです。」

- (1) イエスは再び、自らの死を預言する。
 - ①ここでは、自発的死であることが語られる。

- ②イスカリオテのユダがいなくても、イエスは十字架の死を遂げた。
- (2) 父なる神は、御子を特別な愛で愛しておられる。
 - ①御子がいのちの犠牲を払って御心に従うからである。
 - ②この愛は「アガペーの愛」である。
- (3) イエスの権威
 - ①いのちを捨てる権威(運命を支配する権威)
 - *死の時をイエスは決める。
 - ②もう一度それを得る権威(死に勝利する権威)
 - *イエスの死は、単なる自己犠牲ではなく、復活を前提とした計画である。
- (4) この命令(指示)は、父から来たものである。
 - ①イエスの死と復活は、父なる神からの「命令」に従ったもの。
 - ②ピリ2:9~11

Php 2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、／すべての名にまさる名を与えられました。

Php 2:10 それは、イエスの名によって、／天にあるもの、地にあるもの、／地の下にあるもの
のすべてが膝をかがめ、

Php 2:11 すべての舌が／「イエス・キリストは主です」と告白して、／父なる神に栄光を帰す
ためです。

IV. 信じる者と信じない者の対比(19~21節)

1. 19節

Joh 10:19 これらのことばのために、ユダヤ人たちの間に再び分裂が生じた。

- (1) イエスの「良い牧者」のメッセージが分裂をもたらした。
 - ①「分裂」は「スキスマ」であるが、「鋭い対立」や「深刻な亀裂」を指す。
 - *「教会の東西分裂」の語源となったことばである。
 - ②ユダヤ人社会の4度の分裂
 - *ヨハ7:43(祭りの終わりの大いなる日になされた宣言)
 - *ヨハ9:16(生まれつきの盲人の癒し)
 - *ヨハ10:19(良い牧者のメッセージ)
 - *ヨハ19:6(イエスの十字架刑の決定)
- (2) イエスが来られると、世界に、社会に、家庭に、友人関係に分裂が起こる。
 - ①イエスのことばは、「終末的な選別」を示唆している。

- ②分裂が起こらないなら、聖書的メッセージとは言えない。
- ③ヨハネの福音書の読者は、そのことを体験していた。

2. 20節

Joh 10:20 彼らのうちの多くの人々が言った。「彼は悪霊につかれておかしくなっている。どうしてあなたがたは、彼の言うことを聞くのか。」

- (1) 大多数のユダヤ人たちが、イエスを拒否した。
 - ①指導者たちの判断が、民衆レベルに浸透した。
 - ②「サマリア人であり、悪霊につかれている」(ヨハ8:48)と言われていた。
 - ③「どうして」は「ティ」であるが、強い拒絶の意志が示されている。

3. 21節

Joh 10:21 ほかの者たちは言った。「これは悪霊につかれた人のことばではない。見えない人の目を開けることを、悪霊ができるというのか。」

- (1) 信じる人たちも現れた。
 - ①イエスの「良い牧者」のメッセージは、悪霊つきには語れない。
 - ②見えない人の目を開けることは、悪霊にはできない。

結論：今日の信者への適用

1. イエスの自己犠牲の愛に感謝する。

- (1) イエスは、私たちのためにいのちを捨てられた。
- (2) 感謝するとは、信仰によって応答することである。
- (3) 感謝するとは、イエスのように愛をもって生きることである。
- (4) 感謝するとは、家庭、職場、教会において、自己犠牲的な愛を実践すること。

2. 「雇われ人」ではなく、責任感をもって信仰生活を送る。

- (1) 自分自身が、「信仰のオーナーシップ」を保持する。
- (2) 教会での奉仕、家庭での役割、職場での働きに対して、責任放棄をしない。
- (3) 試練が来たとき、「逃げる」のではなく、キリストの力によって立ち続ける。

3. イエスの権威を認め、神の御心に従う。

- (1) イエスは、すべてを支配しておられる。
- (2) イエスの死と復活は、神の権威によって成し遂げられた。
- (3) イエスは父の御心に従い、命を捨てた。それゆえ、高く上げられた。
- (4) 私たちも、自分の計画ではなく、神の御心に従う生き方を選ぶべきである。